

翌朝再び車上の人となった私は、昨日理塘から戻ってきたばかりの道を再び引き返す方向へと向かって走っていた。既に何度目なのか判らなくなっている折多峠(4298m)を越え、康定と理塘の間にある新都橋という小さな街まで行ったところで、バスは大きく道を折れ、北へ向って進行方向を変えた。

この旅の最後の目的地として、この日私が目指していたのは塔公草原と呼ばれる土地だ。

実はこの一人旅が始まる前、当初の旅行メンバーとチラッと訪れていた場所だった。「わりい」でも四姑娘山の自然紹介等でおなじみの、現地で自然保護区管理局の顧問を務めておられる大川健三氏の案内の下、四姑娘山麓の街である日隆で数日過ごし、旅の本来の目的であった大姑娘山の登山を果たした私達は、風光明媚な土地と誉れ高い丹巴という街へ移動した。丹巴にて2日間美しい景色や現地の方との交流などを楽しんだ後、成都までの中継点となる康定まで戻る途中の昼食休憩で訪れた街がこの塔公だったのだ。その日バスの中でうつらうつら居眠りしていた私は、バスがスピードを緩めた気配に薄目を開け、窓の外の景色を見て驚いた。

ええええ～～？ 何ここ～～!?

大草原の真ん中を突っ切っている道路を挟み、立ち並んでいる建物の向こうには街の奥行きというものほとんど無いようだった。道路の両脇に列に立ち並んだ建物の向こうには緩やかな丘陵の大草原が広がっているばかりで、まるで映画のセットのような街並みだ。が、それよりもまず私の目を引いたのは往来を行き来する人々のほとんどが長く伸ばした髪にテンガロン・ハットのカウボーイスタイルや、赤い布と共に頭上に巻き上げた長い髪をアクセサリで飾り、伝統的な民族の衣服を身につけた者など、皆バキバキの遊牧民達であった事だ。

通りは派手に飾りをつけたバイクが行きかい、まさに西部劇のカウボーイそのままに馬に跨り街を闊歩している者もいる。道路の向こう側に広がっている草原にはいくつかのテントが建てられているのも見受けられ、この町の定住者ではない遊牧生活者もこの塔公草原に集まってきている様子だった。

何なの!? 何なの!? この町は～!? まるでチベット版西部劇の撮影セットの中に迷い込んでしまったよう



塔公の街の神山

祈禱旗でかたどられた三角形は、それぞれ文殊菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩をあらわしてるそうだ

な気分だったが、バスを降りて辺りの風景を見た私は、更に不思議な気持ちに包まれた。

町の突き当りには否が応でも人目を引く立派な寺院が建てられおり、道路を挟んで屏風の様に列に伸びている町並みはこのお寺の門前町の様な様相だ。町の頭上には向かいに聳える丘の中腹からこの細長い町を跨ぐように道路の向こう側まで、まるで万国旗のように見えるタルチョが長い長いロープで張られ、青い空を背景に色とりどりの祈禱旗が風に吹かれていた。町の端々には小高く盛り上がった築山の上にチオルテンと呼ばれる仏塔が建てられ、更に寺院の裏手から町の正面に聳えている丘の斜面いっぱいにはダルシンと呼ばれるノボリのようなチベット仏教の祈禱旗が三つの三角形をかたどってギッシリと立てられて町を見下ろしているのがどこか怪しく奇怪な雰囲気にも思われた。

チベット仏教について特に詳しい知識を持たない私には、実際のところがどうなのかは想像の域を出ないが、何やらこの町はこれまで訪れてきた何処よりも宗教色が濃く感じられる土地のように思われた。

私はいっぺんにこの一風変わった不思議な町に夢中になっていた。

軒を並べる門前町にはチベットのアクセサリや民具など、面白そうなお店が軒を連ねているし、その場にいるチベット服姿の女性や勇ましい天空のカウボーイ達に目を奪われ、なにより彼らが連れている、ちょっぴり汚れた顔をした野生児達の可愛らしさといったら堪らない。間口を広く開放放ったビリヤード

店では粋な荒くれカッボーイ達が、カツーン、カツーンとビリヤードに興じている姿も眺められた。お金でも賭かっているのか当事者以外の観戦者も勝負の行方を熱い眼差しで見つめ店内の熱気が表まで伝わってくるようだ。

旅行メンバーの面々と一緒に歩きながらも、私はついつい吸い寄せられるように目についた店の中に入り込んだり、可愛い子供を見かける度に駆け寄っていった折り紙を折って見せたりと、興味をひかれた方向に夢遊病者のようにフラフラと歩き出してしまい、その度に旅行メンバーに加わっていた母に袖を引かれて叱られた。

「団体行動なんだから、一人でどこか行っちゃダメでしょう!」

「子供じゃないんだから勝手にいなくなるしないで!!」

「何やってるの! いい加減にしなさい!!!」

そりゃあグループ行動で個人が勝手に動いていたら皆の迷惑になるだろうと、そんな事は解っているが、私はこの町の雰囲気ですっかりのぼせてしまっていた。この期を逃せば再びこんな面白い場所に来るチャンスなど、そうないだろう(この時はそう思っていた)、そんな貴重な時間を無駄にしてじっとしてなきゃならないなんて無理な話だ。

しかし私以外のメンバーは特にこの地に執着する様子もなく、旅の一行はこの塔公ではお寺を拝観をした後、町の中のレストランで食事を取るとすぐに再びバスに乗りこの町から立ち去ってしまう事となり、私は歯軋りしたい思いだったのだ。町の食堂で食事しながら案内役の大川さんに伺った話では、この塔公は近年に作られたばかりの観光色の強い町で、遊牧民達の姿が数多く見られるのは付近の草原から遊びに来ている者たちなのだそうだ。町としての歴史があるわけでもなく、本当はそんなに面白い場所じゃないとの説明を受けたのだが、それでも私は自分の気持ちを静める事はできなかった。

なるほどあの日訪れた塔公の町中には観光客風の旅行者の姿も数多く見られ、寺院ではしっかりと入場料も徴収された。軒を連ねた店は土産物を扱う店も多く、草原で暮らすカムパ(この地方に暮らす民族の男性を指す言葉)の生活が店内で紹介されていると広告を掲げた店や、草原でのホース・トレックを誘うチラシのようなものを配っている男の姿も見受けられるなど、確かに観光地的な色合いが感じられない事もな

かったが、それでも遊牧民達で沸き立っているような活気が感じられた町の雰囲気や、大草原に遊牧民とチベット仏教という、私がこの四川省のカム東部地方に惹きつけられる要素が凝縮されたようなこの塔公の町は大いに魅力的だった。

とにかく興味を感じた土地は、自分で納得のいくまで歩き回り味わってみななければ気の済まない私は、町を出るバスの窓の外に流れ去っていく風景を眺めながら拳を握りしめ、「ああ～～、ダメだ! ダメだ! ダメだ! ここはいつか絶対に一人で戻ってこなくっちゃ～!」と心の中で何度も叫んでいた。

その後日本に帰国する旅行メンバーと別れ、一人でこの地に残る決意を固めた私は、すぐさま旅の間に必ず訪れたい場所としてこの塔公をしっかり心の中のリストに刻み込み、その望みが叶えられる日をずっと楽しみにしていたのだ。改めて思えば塔公に限らず今回の一人旅全ての旅程が、過去の旅行で想いを残していた土地を自分流の歩き方で再確認する為の旅だった。そうして過去に訪れた土地を時間をかけて一つ一つゆっくりと歩きなおしてみれば、きっと以前には見えてこなかった新しい何かが見つかるのだ。

康定の宿に大きなザックと不要な荷物は預けてしまっていたので、今回の移動は小さなザック一つでの身軽な旅だった。昨夜泊まった香格里拉(シャングリラ)招待所の小姐は気さくな人柄で、私が長旅で薄汚れた大きなザックを見せ「2、3日ここで預かってくれる?」とお願いすると、洗濯機の使用許可を求めた時と同様に一つ返事で「いいわよ」と受け取ると、自室と思われる部屋の中に運び込んでくれたのだ。

相変わらず空は高く青いお天気だった。前日の理塘から康定に向かった時の寂しさに沈んだ気持ちはずっかり影を潜め、最後の楽しみにとずっと温めていた塔公草原へと向う旅路は、バスの不具合により修理の為に小一時間程緊急停車するなど、この辺の土地にはありがちなハプニングさえ楽しめてしまうほど、私の気持ちは弾んでいた。

ああ嬉しい! あの時はいったいつ、この町に戻ってくる事が出来るだろうと無念の涙を呑んだ場所に、こんなに早くこれる日が来るとは思わなかった。

明るい光に包まれた草原の真ん中をポンコツなミニバスに揺られ、幸せな気分を味わっているうち、広い草原の真ん中に忽然と現れ映画のセットのような、あの不思議な町に到着した。

(次号に続く)